

内村鑑三と自然

加藤 幸子



自然物と謂はざるを得ず 余は東京に
来りて以来又米國に在学中有名なる宗
教家に接せざりしにはあらずといえど
も 是等の人士が余の靈魂におよぼせ
し所の勢力は独り石狩の平原に漂泊し
聖教一冊を懐にし小銃を肩にし禽鳥の
跡を慕ひ又北海の浜に漁夫の疾苦を訪
ひ水産動物上に顕はる、神の栄光より
得し所の効力に比すれば 実に僅少な
るものと謂はざるを得ず」

つまり内村の真実の師は、クラーク
博士ではなくて、まちがいなく北海道
の大自然であったのだ。

先日、岩波書店から刊行中の「内村

鑑三全集」の「自然と人生」の巻に、
所感を書くことになった。ピューリタ
ニズムに近いほど、自他に敵しかった
この偉人に対して、多少の畏れを抱き
つつ与えられた文章を読んでいるうち
に、意外な面が大きくクローズアップ
されてくるのを感じた。それは内村の
人生の出発点として北海道の自然が大
きな役割を担った、という事実である。
少し長いけれど、有名な「我が信仰の
表白」というエッセイの一部を紹介し
てみよう。

「北海道に在留中は余の宗教心を養
ひしものは重に山川風月と草木鳥獸等
総て自然の物体なりし 余は博物学の
研究に従事し居りたれば余をして万有
の神に近づけしめしものは実に北海の

も地元の方の家にただ泊めていただ
いた。学生さんがこんな場所に来てく
れるなんて！というわけである。原始
の森はいたるどころにあり、湿原も手
つかずのままだった。ということは、
人が行く所ではなかったからだ。この
時代、内地ではほんとうに一握りの有
識者により自然保護が唱えられはじめ
ていたが、私自身はそんなこと考え及
ぶことではなかった。人跡未踏の北海
道の大自然がこわされるなんてありえ
ないことだった。私は自分自身が属し
ている、ヒトという動物についてこそ、
もっとよく考えてみるべきだったのだ。

内村が札幌農学校に入学したのは、
一八七七年、今から百十数年前である。
原始の自然のたたずまいは、現在から
は想像できぬほど豊かであったことだ
ろう。それにはとても及ばないとはし
ても、私が大学生活を送ったころ（一
九五〇年代後半）の北海道の自然も、
幾らかはその面影をとどめていた。札
幌のシンボル手稲山は車道もゲレンデ
もなく、無傷な山そのものの姿をとど
めていた。月に最低一度は登りにいく
もつとも好きな山だった。冬は樹林の
あいだを滑べつておりた。山全体がス
キー場だった。網走の原生花園も能取
湖畔でも、私が花々に埋もれて座って
いるあいだじゅう傍にだれも来なかつ
た。そして極めつきは知床で、羅臼岳
登山道は人に会うよりクマに会う確率
がはるかに多く、ラウスでもウトロで

その住民ではない私は、差出口をす
る立場ではないかもしれないが、遠く
から眺めるときにかえってはっきり予
知できる現象もあるのである。
森林伐採に対しては世論がようやく
たちあがって来た陰で、ひそやかに進
行しているのはリゾート化である。
「此広き、而かも美しき日本国に生れ
来て今や清潔なる保養地としては一つ
も発見することは出来ない。……海浜
も山間も今は腐蝕の跡を留めない所は
ない、日本全土は俗化せりと言ふも、
誰も此言を否む者はあるまい」と書い
たのも内村鑑三だった。

加藤幸子（かとう ゆきこ）
札幌生れ。子供のころから生き物が大
好き。生地 naturally 引かれて北大農学部
へ進学。現在作家、日本野鳥の会理事、
日本自然保護協会評議員。十年にわたる
活動の結果、昨春秋、東京港野鳥公園開
園にこぎつけた。近著「時の筏」（新潮
社）「わが町東京野鳥の公園奮闘記」
（三省堂）「わたしの動物家族」（朝日
新聞社）